

前期サルトルにおける他者の出現

赤阪辰太郎

一、はじめに

本稿の目的は、ジャン＝ポール・サルトルの「存在と無」の他者論における他者の出現という出来事に焦点をあてつつ、そこから理解される他者経験の構造と、それを支える間主観性の基礎を提示することにある。

他者の出現についての現象学的考察は、フッサール以来、身体化された自己意識と他者の固有身体との関係の解明を通じて進められてきた。『デカルト的省察』では、他者知覚を、自己身体と他者身体の類似に基づく統覚として捉え(Hus I, §50)、その受動的な基礎として身体の「対化」現象を見出す(Hus I, §51)。メルロ＝ポンティはさらに、身体的主体性の基礎に二重感覚という「一種の反省」を置き、他者経験をその拡張と見なす¹。こうして、身体化された意識による他の身体の把握として他者経験を捉えることで、自我→自己身体→他者身体→他我へと辿る他我認識の推論的で不確実な道は避けられ、他者の直接知覚への道が拓かれる。そこで他者にかんする一切の謎が解消されるわけではなく、他者は「私が私自身に対し透徹ではない」と同じように不透明であり、他者はまったく不可知にとどまるのでも、

私に対して透明な存在であるのでもない²。こうして、他者の出現は身体的自己意識による他者の固有身体の知覚へと還元され、間主観性は間身体性を意味する。

サルトルは有名な「まなざし」に関する議論のなかで、把捉不能な主観としての他者による触発を描き、他者の他性を明示した点で評価される。しかし、再帰的自己感覺に基づく身体論を前提しないこの議論はしばしば批判の対象となる³。とりわけ他者の出現の動機にかんして問題を含むと指摘される。

第一に、バルバラスによれば、サルトルは、意識の存在とみなされる対自と即自の峻別ゆえに、自己の客観的存在の構成を他者のまなざしに求める⁴。その一方で、主観としての他者をあらゆる対象化から逃れた存在とみなすことで、他者が固有身体から分離される。そのため、对他を構成する他者を体験するための動機を世界内にもつことができず、何をきっかけにまなざし体験が成立するかを解説できない。その上でバルバラスは、主観・他者の体験が可能であるためには他者の受肉が要請される、と主張する。

第二に、サルトルがこの動機の不在を他者関係のアブリオリな構造

に訴えることで乗り越えようとしている、という指摘がザハヴィによつてなされている。ハイデガーの共存在が現存在の構造と見なされる点をアブリオリズムとして批判し、他者との「出会い」に対他存在の基礎を求めるにもかかわらず¹³、サルトル自身は〈私が対象となるとき他者が存在する〉ことを他者経験の可能性の条件として前提しているというのである¹⁴。

さらに付加的な論点として、サルトルは自他関係の敵対性（「相克」）を強調するが、相互の否定は意識化以前の身体同士の平和的共存の上に成立するものではないか、という疑問が提示される（Zahavi2002, pp. 280-281）。

以上を背景としつつ、本稿では『存在と無』における他者の出現について論じる。同書においてこの主題は、無の問題を提起する第一部、意識の存在とみなされる対自存在の構造を描き出す第二部の次に置かれた、第三部「対他存在」において主に論じられる。他者経験全般にとって本質的なこの主題は第三部全体にわたって扱われるため、われわれも以下の構成上の必要に応じて、適宜その議論を参照する。本稿ではサルトルにおける他者経験を二つの水準から成り立つものと理解したい。すなわち、経験的水準と、他者の根本的な現前が扱われる存在関係の水準である。上の批判はこの二つの水準の関係をめぐって展開されている。本稿は次のように進む。第一に、経験的な他者の出現を支える構造として「側面的固有性」の概念に焦点を当てる。この過程でわれわれはサルトルによる身体概念の拡張について論じる。第二に、経験的な他者の出現と、それを成立させる他者の「根本的な」現前との関係を明らかにする。根本的な現前において成立する自他の存在関係が、間身体性とは異なった間主観性である。続いて、他者経験

の現実的な基礎を「誕生」という「絶対的出来事」のなかに見出し、経験的水準と存在関係の水準が交錯する点として「示す」として、他者の出現にかかるサルトルの理論構成を再提示する。

二、他者の出現の経験的条件と存在論的条件

他者の出現の条件を明らかにするために、以下では他者の出現を支える構造を事物の側面的固有性と（二一）、存在関係（二二）の二側面から論じる。前者は他者が多様な仕方で経験されるための世界の構造に、後者はこれらの多様な出現を背後から支える存在論的基礎に対応する。

二一、側面的固有性

サルトルが他者について論じるとき、知覚野における他者の固有身体の出現のみならず、固有身体が不在の場面で他者を観取する例をも取り上げる点は注目に値する。というのも、この例の選択に他者経験成立の基準が端的に示されているからである。「私が家主を待つ」このサロンは、その全体のうちに、所有者の身体を顯示している（EN381-2）。ここで身体と名指されるものは他者の固有身体と似ても似つかない。にもかかわらず、われわれは確かにそこに他者の端的なあらわれを見出す。ここでサルトルは、人間存在を固有身体に受肉した意識と捉え、身体知覚を他者知覚の唯一の源泉とするような思考と距離を取っている。では、それによって彼は身体概念をどのように拡張し、何を他者の出現の条件として認めるのだろうか。以下では、他者経験の成立を支える世界の構造を「側面的固有性」概念から描き出し、経験的な他者の出現のための条件を明らかにする。

まず、サルトルの身体觀の基本的な構図を確認しよう。サルトルは身体を大きく二つの位相から捉える。すなわち「対自身体」と「対他身体」である¹⁵。後者は他者によってまなざされる私の客觀的存在を指し、前者はまなざしを意識しない対自分が世界へとコミットする際に生きられている身体を指す。この生きられた対自身体は両義的に定義される。一方で、それは対自の超越、すなわち世界に向けての行為的なコミットメントにおいて通り過ぎられ、乗り越えられて、さらつ

う配置されており、そのことと道具に目的に奉仕する使用的価値とは異なる価値を帯びさせることを意味する。フツサールは文化的対象（作品や道具など）がある主觀とその志向を指示すると述べるが（Hua I, 124）、サルトルによれば、この指示が可能であるのは、われわれが対象と所有的関係を結ぶとき事物に側面的固有性を付与するからにはならない。この固有性は、固有身体の知覚がわれわれに了解させる

在関係が、間身体性とは異なった間主観性である。統いて、他者経験

し、経験的な他者の出現のための条件を明らかにする。

まず、サルトルの身体観の基本的な構図を確認しよう。サルトルは身体を大きく二つの位相から捉える。すなわち「対自身体」と「対他身体」である¹⁶。後者は他者によつてまなざされる私の客観的存在を指し、前者はまなざしを意識しない対自が世界へとコミットする際に生きられている身体を指す。この生きられた対自身体は両義的に定義される。一方で、それは対自の超越、すなわち世界に向けての行為的なコミットメントにおいて通り過ぎられ、乗り越えられているものの全体を指し（「対自によつて存在・される偶然性」（EN379））。他方で、超越によつて手段化された道具複合の全体が指示する中心を意味する（「参照の中心」（Ibid.））。¹⁷ハして対自身体は、対自の超越を中心に、それが波及する全体および状況が指示示す中心という「側面の相補性」から規定される¹⁸。

世界内での他者の把握にもこの規定はかかわる。道具的事物の固有の配置が、その中心としての他者の固有性を指示示すのである。

私は、この超越「他者」を世界のうちに捉えるのであり、しかも根源的に、私の世界に属する道具・事物のある一つの配置として捉えるのだが、それは、それらの道具・事物が、さらにその上、世界のただなかに存在する一つの二次的な参照の中心、私ではない参照の中心を指示するかぎりにおいてである。（Ibid.）

ハハで私の状況のなかに見出すことができる諸対象が私とは別の参照の中心に向けられるのは、対象が備える「側面的固有性」（EN380）によつている。側面的固有性とは、道具が匿名的な「ひと」の使用へと開かれているというだけでなく、特定の誰かに適して用いられるよ

う配置されており、そのことが道具に目的に奉仕する使用的価値とは異なる価値を帯びさせる」とを意味する。フッサールは文化的な対象（作品や道具など）がある主観とその志向を指示すると述べるが（Hua I, 124）、サルトルによれば、この指示が可能であるのは、われわれが対象と所有的関係を結ぶとき事物に側面的固有性を付与するからにはかならない。この固有性は、固有身体の知覚がわれわれに了解させる他者の事実性とは別の仕方で、「家の壁や家具の上に少しづつ沈殿していった所有の層」¹⁹や「所有の雰囲気」（MA535-6）として感じ取られ、私とは別の世界に向けての超越とその出発点が存在することを端的に告知する。「事物がその側面的二次的配置によって指示するものは、身体としての他者である」（EN380）。

ハハして「他者は根源的に状況のなかの身体として私に与えられる」（EN384）。ハハで他者の状況を構成するものは、目的に向けた意図的な行為の相関者に限定されない。「身体は、呼吸する空気との関係によつても、飲む水との関係によつても、食べる肉との関係によつても規定される」（EN385）。意図的・能動的行為の背後で「背景・身体」（Ibid.）をなす」の契機は「生命」（Ibid.）と呼ばれるが、ここでは文化的対象だけでなく、環境世界の全体が身体を告知するものとして名指されている。

やがて、状況のなかの身体は他者の出現についての期待はずれや更新可能性を織り込んだモデルである。状況を通じた他者身体の告知は「両義性」（EN332）を伴うが、それはわれわれが状況を「なんらかの明示的な構造」（Ibid.）を図として、それを取り囲む全体を無差異な地として把握してることによる。「私が他者の意図について思い違いをすることがあるのは、私がそのしぐさのまわりに全世界を組織づ

ける仕方が、事実その世界が組織づけられる仕方と異なるからである」(Ibid.)。

ハラトとしてサルトルは「状況のなかの身体」という拡張された身体概念を提示するのだが、それにより、身体を器官の集合とみなす解剖学的・生理学的言説から距離を取るだけでなく(EN379, 388-389, 398-399)、この概念を他者経験の多様なあり方を反映したものへと刷新する。その意味で、この議論は他者経験の現象学的分析にとって積極的意義をもつ。ここで身体が指す外延は大きく拡張され、不在の他者との関係を扱うことができるほどになる¹⁰。先の例では、部屋の雰囲気によつて他者の存在が積極的に記述された。遠足に来たテレーズが、欠席したピエールの不在を感じる、という例では、そこに居ない他者が不在を通じてはつきりと感じられる、という日常的な他者経験の一側面が取り上げられる¹¹。さらに、手紙によつて他者が提示される場面をサルトルは度々扱い、日記のなかではその特異な時間経験が分析される¹²。われわれはいずれの事例においても他者の出現を認めることができる。しかしそれは知覚野に固有身体が与えられているからではなく、身体が行為を通じて状況全体に広がり、その痕跡をわれわれが認知しうるからである。

二二、存在関係

他者経験の根柢を受肉した意識としての固有身体の知覚のなかに求めるかわりに、身体概念を拡張しつつ、サルトルは状況のなかの身体の観取のなかにそれを見出した¹³。こうして他者の出現のための経験的条件が素描された。しかし先のバルバラスによる批判が提起する動機をめぐる問い合わせ残る。状況のなかの身体が対他を構成する他者で

あることは、この身体の認知によつて確実には知られ得ない。サルトル自身が指摘するように、世界内の対象・他者の知覚は錯覚可能性を織り込んだ蓋然的なものであり、対他を構成する他者の存在の確實性は別の仕方で与えられる必要がある。そこでサルトルは、経験的な他者の出現が成立するためのより基礎的な次元として、まなざしの体験の確実性と、他者との存在関係という二つの契機に注目し、両者を連づける。しかし、経験の背景にある次元を指摘することはアприオリズムに陥る危険と隣合させではないか。以下では、まなざし体験と存在論的次元との相関関係を整理した上で、この新たな問い合わせを取り組もう。

第一に、われわれは羞恥や自負、恐怖のような固有の感情において、自己の客観的存在の触発についての確実な体験をもつ。これがまなざしの体験である(EN260)。

体験の確実性とは独立に、意識個体間で関係が結ばれており、世界内でそれが顕在化するとき、一方が主観であり、他方が対象となる(EN296, 309-310, 318)。これを「認識の外部において」(EN292)結ばれる、存在間の関係という意味で「存在関係」と呼ぼう¹⁴。他者と私との存在関係は「相互的な」「内的否定の関係」(EN323)と呼ばれる。内的否定とは、対自存在が他の存在(の性質)を規定する際、その規定の否定として自己自身を構成するような関係を意味する(EN211)。ハラトとしてサルトルは、否定された存在が否定する存在に「影響を及ぼす」という意味で、二項間の「存在のきずな」を見出す(Ibid.)。それ自体が内的否定の主体となりえない即自存在との関係とは異なり、他者関係においては、内的否定は自他のきずなると同時に「絶対的分離」(EN325)を構成するものもある。双方

向的な内的否定のうち、一方が否定する主体として関係が顕在化しているときには、他方は否定されたところの性質を通じて、否定する主体を規定するような対象として生起している。この関係は、他者との関係が具体化したときにのみ顕在化するため、経験から独立した構造ではないが¹⁵、他者関係が状況のなかで結ばれるときは必ず取られる形式であるという意味で必然性をもつとされる。これをサルトルは「事実の必然性」と呼び、存在関係は事実の必然性をもつことを示す。

ない。むしろ反対に、それらの経験を可能にするのは、他者の存在についての私の確信である」(EN319)。「われわれが他者の対象化を他者に対する私の関係の第一の契機として理解することができるのは、私に対する主観・他者のこの現象から出発してであり、私が引き受けた私の対象性のうちで、私の対象性を通してである」(EN326)。他者の存在についての確信は、世界のなかに(蓋然的な)対象・他者の裏

向的な内的否定のうち、一方が否定する主体として関係が顕在化しているときには、他方は否定されたところの性質を通じて、否定する主体を規定するような対象として生起している。この関係は、他者との関係が具体化したときにのみ顕在化するため、経験から独立した構造ではないが、他者関係が状況のなかで結ばれるときには必ず取られる形式であるという意味で必然性をもつとされる。これをサルトルは「事実の必然性」と呼び、存在関係は事実の必然性をもつとされる(EN289-290, 315, 319)。

ところで、まなざしの体験における触発は、触発される者の対象存在を、私に対象として認識させることなく顕示するのだから、存在関係から、まなざしがあるところには主観・他者の現前があるはずである。ただし、主観としての他者は対象化によって把捉不可能であり、事物の領域に位置づけられない以上、個体化されない「数以前の」存在である(EN320)。それゆえ、主観としての他者を誰かとして見ることはかなわないが、存在関係と触発の確実性ゆえに、その存在は確証されている。「コギトによつて捉えられた私の意識が疑いなく意識自身と意識の存在を証言するのと同様、特殊な意識、たとえば「羞恥意識」はコギトに対して、疑いなく、意識自身と他者の存在を証言する」(EN312)。こうして、サルトルはまなざしの体験という「根源的な現前」(EN296, 319)を「私が他者についてもつ認識によるのとは別の仕方で他者があらわれるときの根本的な結びつき」(EN292)とみなし、他者関係の基礎に置くのである。

さらに、まなざしの体験と存在関係の縫合が、状況における対象としての他者の経験を動機づける。「他者の存在についての私の確信は、それらの経験「知覚野における対象・他者の経験」に依存するのでは

ない。むしろ反対に、それらの経験を可能にするのは、他者の存在についての私の確信である」(EN319)。「われわれが他者の対象化を他者に対する私の関係の第二の契機として理解することができるのは、私に対する主観・他者のこの現前から出発してであり、私が引き受けた私の対象性のうちで、私の対象性を通してである」(EN326)。他者の存在についての確信は、世界のなかに（蓋然的な）対象・他者の痕跡を読みとる、という私の行為を背後から支えている。さらにこの確信は、私がまなざされる体験の確実性と、存在関係の事実的必然性にもとづいている。このように、存在関係とまなざしの体験が、対象としての他者への関係を動機づけている。

ここで、存在関係とまなざしの体験の相関性をより明確に把握するために、ザハヴィの批判に立ち戻りたい。「まなざしとはたんに私の根源的な対他存在(EN471/543)の具体的な顕示にすぎず、他者はそれを通して私が対象となるときあらゆる場所に現前しており、この他者への基礎的な関係が具体的な他者についての私の個別的な経験の可能性の条件である（これが個別的な他者との具体的な出会いが私の基礎的な対他存在のたんなる経験的バリエーションとして記述される理由である—EN327/373）、ところがサルトルが主張を進めるとき、彼が以前批判していたような類のアприオリズムを自ら主張するという理由で彼を批判しないことは難しい」(Zahavi2002, p. 271-272. 引用内頁付はTel Aviv版(英訳)。ザハヴィはここで存在関係をある種の理念と見なしている。そしてこの理念が個別な他者経験において、アpriオリな条件の特殊化として具体化する、という構図を描く。この解釈をとるなら、明らかに、存在関係はまなざしに由来するわけではない。この関係はまなざし体験において確信されるものの、関係そのも

向的な内的否定のうち、一方が否定する主体として関係が顕在化しているときには、他方は否定されたところの性質を通じて、否定する主体を規定するような対象として生起している。この関係は、他者との関係が具体化したときにのみ顕在化するため、経験から独立した構造ではないが、他者関係が状況のなかで結ばれるときは必ず取られる形式であるという意味で必然性をもつとされる。これをサルトルは「事実の必然性」と呼び、存在関係は事実の必然性をもつとされる（EN289-290, 315, 319）。

ところで、まなざしの体験における触発は、触発される者の対象存在を、私に対象として認識させることなく顕示するのだから、存在関係から、まなざしがあるところには主観・他者の現前があるはずである。ただし、主観としての他者は対象化によって把握不可能であり、事物の領域に位置づけられない以上、個体化されない「数以前の」存在である（EN320）。それゆえ、主観としての他者を誰かとして見ることはかなわないが、存在関係と触発の確実性ゆえに、その存在は確証されている。「コギトによつて捉えられた私の意識が疑いなく意識自身と意識の存在を証言するのと同様、特殊な意識、たとえば「羞恥意識」はコギトに対して、疑いなく、意識自身と他者の存在を証言する」（EN312）。こうして、サルトルはまなざしの体験という「根源的な現前」（EN296, 319）を「私が他者についてもつ認識によるのとは別の仕方で他者があらわれるときの根本的な結びつき」（EN292）とみなし、他者関係の基礎に置くのである。

さらに、まなざしの体験と存在関係の縫合が、状況における対象としての他者の経験を動機づける。「他者の存在についての私の確信は、それらの経験「知覚野における対象・他者の経験」に依存するのでは

ない。むしろ反対に、それらの経験を可能にするのは、他者の存在についての私の確信である」（EN319）。「われわれが他者の対象化を他者に対する私の関係の第一の契機として理解する」とができるのは、私に対する主観・他者のこの現前から出発してであり、私が引き受けた私の対象性のうちで、私の対象性を通してである」（EN326）。他者の存在についての確信は、世界のなかに（蓋然的な）対象・他者の痕跡を読みとる、という私の行為を背後から支えている。さらにこの確信は、私がまなざされる体験の確実性と、存在関係の事実的必然性にもとづいている。このように、存在関係とまなざしの体験が、対象としての他者への関係を動機づけている。

ここで、存在関係とまなざしの体験の相関性をより明確に把握するために、ザハヴィの批判に立ち戻りたい。「まなざしとはたんに私の根源的な対他存在（EN471/543）の具体的な顕示にすぎず、他者はそれを通して私が対象となるときあらゆる場所に現前しており、この他者への基礎的な関係が具体的な他者についての私の個別的な経験の可能性の条件である（これが個別的な他者との具体的な出会いが私の基礎的な対他存在のたんなる経験的パリエーションとして記述される理由である—EN327/373）」、こうようすにサルトルが主張を進めるとき、彼が以前批判していたような類のアブリオリズムを自ら主張するという理由で彼を批判しないことは難しい」（Zahavi2002, p. 271-272. 引用内頁付はTel Aviv版/英訳）。ザハヴィは「この存在関係をある種の理念と見なしている。そしてこの理念が個別の他者経験において、アブリオリな条件の特殊化として具体化する、という構図を描く。この解釈をとるなら、明らかに、存在関係はまなざしに由来するわけではない。この関係はまなざし体験において確信されるものの、関係そのも

のは羞恥の体験と独立に、基礎的な対他存在として、他者経験の可能性の条件として指定されている。そしてこのアприオリな条件の指定こそが問題であった。

上の論点はサルトルの他者論の理論構成の根幹にかかわる。ここで問われねばならないのは、この条件が真に経験から切り離されたものか、あるいは、サルトルが主張したよう、「出会い」に根をもつつか、ということであり、もつとすればいかなる事実に根をもつのか、ということである。この論点を引き受けた上で、次に存在関係の根拠としての「絶対的出来事」に焦点を当てよう。

三、存在関係の基礎としての絶対的出来事

しばしば注目されることもなく通り過ぎられる箇所ではあるが、他の者の「根源的現前」が「歴史以前的歴史化」(EN322)と名指されている点は、この問題にとって決定的に重要である。というのも、この概念が指示するものこそ、存在関係の発生的起源だからである。この概念は、対自の出現が他者を前にした出来事であるという意味で対他側面をもつ、と指摘される際に導入される。必要なかぎりで文脈を整理しよう。

よく知られるように、「存在と無」は即自と対自の対概念を中心構成されている。前者はいかなる否定性ももたない全き肯定性、存在充実として定義され、後者はそれを否定的に規定することで、指示や距離・関係を導入し、世界の意味を開示する意識の存在と見なされる。論述の過程でサルトルは、対自の出現——無化による世界開示の可能性そのものの開け——の発生的起源にある出来事を問へ。この出来事は「絶対的出来事」と呼ばれるが、それは「誕生」(EN174)の事

実と同一視される⁶⁶。誕生とは、原初的な時間化のプロセスであり、この絶対的な始まりにおいて、現在と以前の最初の分岐、過去化の最初の一撃が生じ、今ではないものとしての過去という最初の否定性から、前後関係と時空間的尺度という開示の条件そのものが出現する

(EN174:175)。

ヒュームでサルトルは、対自と対他を混同しないように留意しつつも(EN322)、対他の起源を絶対的出来事のなかに位置づける。「おそらくわれわれの人間的現実は同時に対自と対他であることを要求する。」

〔…〕 同様に私の対他存在は、私の「即自」存在への出現のように、絶対的出来事という性格をもり」(Ibid.)。「存在への出現」という記述に注目しよう。対自は自己時間化のプロセスを通じて世界を開示するが、サルトルはこれが他者たちを前にして行われる、と指摘する。

「私は他者への現前として自己時間化する」(Ibid.)。すなわち、自己時間化の出来事は、過去・現在・未来をつなぐ自己歴史化の可能性を開くのみならず、他者たちが既に作って來、また私が參入しつつともに歴史化してゆくような具体的な人間的歴史の条件の出現をも意味するのである。

さらに踏み込んで、この出来事における「私の意識と他者の意識との最初の関係」(EN293)の生成の具体相を追つてゆこう。自他の最初の関係は、形式的には内的否定による「相互性の関係」(EN323)と特徴づけられるが、それはけつして、あらかじめ個体化され自律的に存在する私と他者との外的関係ではない。そうではなく、自他の「双子的な出現surgissement gémelle」(EN292)という側面をもつており、「他者と対になる存在être-en-couple-avec-l'autre」の生成なのである。「対couple」や「双子的gémelle」という語によつて名指され

るとおり、それは他者が私を構成したり、逆に私が他者を構成したりする関係を指すのでもない。「私が他者であることを拒むために承認する他者は、なによりますそれ、とつて私の対自が存在するもの」(EN324)であり、その意味で、絶対的出来事とはまさに二項の同時的・相互依存的な共同出来なのである。フッサールは一九一四年頃の草稿の中で「私は汝との対比のなかはじめて構成される」(Huа

存在関係をアприオリな法則と見なすザハヴィの立場に対し、この

るとおり、それは他者が私を構成したり、逆に私が他者を構成したりする関係を指すのでもない。「私が他者である」と拒むために承認する他者は、なによりますぞれにとつて、「私の対自己が存在するもの」(EN324)であり、その意味で、絶対的出来事とはまさに二項の同時的・相互依存的な共同出来事なのである。フッサールは一九一四年頃の草稿の中で「私は汝との対比のなかではじめて構成される」(Hua XIII, 247)と述べたが、サルトルにおいても、自己の成立はこの対比Kontrastの出現のなかにある^④。対比のなかで自己と他者が定立され、へくるやうなこの力動的な場は、やはり作動する双向向的な否定作用として記述されるだろう。その意味で、そこは平和的な共存の場ではない。しかしこれを確立された自己同士の敵対関係へと図式化するのもできない。なぜなら、この場において引き起しやれてくるものこそが、私と他者の敵対の基礎の出現だからである。

絶対的出来事が対自の出来事であると同時に対他の出来事であり、他者経験が他者の根源的な現前をたえず参照し続けるならば、事実的必然性をもつとされる存在関係は、自他の原初的な生成の出来事の絶えざる再生成の静態的な表現を意味し、絶対的出来事がもつ発生的構造の形式化を意味する、と理解することがよほ。つまり、存在関係はわれわれの生と独立の抽象的な法則などではなく、われわれの世界への出現以来作動し続けている、自他の生成の力動性そのもののなものである。

四、結論

本稿を締めくくるにあたり、これまでの議論を振り返ろう。われわれはまず、サルトルの他者論が再帰的身体的自己意識から出発しない

点を確認し、続いて状況全体に拡張された身体概念を見出した。この概念によつて、固有身体に基づかない他者経験を、事象に即した適切な仕方で現象学的分析の俎上に載せる可能性が拓かれた。その後、多様な他者経験の基礎にある存在論的な水準に目を向け、いわゆるまなざしの体験と、自他の存在関係との相関性を明らかにした。やがて、この存在関係をアприオリな法則と見なすザハヴィの立場に対し、この関係の事実的な基礎として誕生の出来事を提示した。この出来事において生起しているものいふ、間身体性とは別の仕方で捉えられた間主観性の基礎である。

注

(1) M. Merleau-Ponty, *Signes*, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 2001[1960], p. 274.

(2) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p. 405. サヘルヤセハリハニムヒトヒ他社ヒトの身体の不透明性と他者の神秘の並行を見出す(D. Zahavi, *Self-Awareness and Alterity*, Evanston, Northwestern University Press, 1999, pp. 170-171)。

(3) サルトルの「重感覚批判」にシテEN343⁵参照。ハジマリヒトセ批判的考察はM. G. Peckitt(2011), 'Living and Knowing Pain: Sartre's Engagement with Maine de Biran' in Jean-Paul Sartre: *Mind and Body*, Word and Deed, Jean-Paul Boule(é)d), Newcastle upon Tyne, Cambridge Scholars Publishing, pp. 27-40⁶参照。

〔註〕 R. Barbara, « Le corps et la chair dans la troisième partie de *L'Etre et le Néant* » in J.-M. Mouillie(é)d), *Sartre et la phénoménologie*, ENS Editions, Lyon, 2001, pp. 279-296.

(E) D. Zahavi, 'Intersubjectivity in Sartre's *Being and Nothingness*' in *Alter revue de phénoménologie*, n° 10, 2002, pp. 265-281.

(F) 「われわれは他者に出でるのであり、構成するのではなく」(EN289)。サルトルのハイデガー批判についてはZahavi2002第一節を参照。

(G) 谷口佳津宏「サルトルの身体論」. 日「アカデミア」人文・自然科学編、第三弾、110-111' pp. 31-45は別の角度から自他の身体の同型性にかんするアオリ的な仮説を指摘する。

(H) これに対自による対他身体の捉え返しとしての「身体の第三」の次「元」が続くが、(I)では立ち入らない。サルトル身体論の構図の明快な整理はPh. Cabestan, « La constitution du corps selon l'ordre de ses apparitions » in *Qui suis-je?*, Paris, Hermann, 2015, pp. 156-180を参照。

(K) 「私の身体は世界と共外的であり、諸事物が「そぞろくで指示する」の唯一の散らばつており、同時に、それらの事物が「そぞろくで指示する」の唯一の点である [...]」(EN358)。

(L) 「ある家が取り憑かれて...」とは、金や労苦をもつてしても最初の占有者によるこの家の所有=憑依という絶対的形而上学的な事實を、消し去ることができないと云う」とである。実のところ、古い屋敷に取り憑く幽霊は、格の下がったラレス「家の守り神」である。けれども、このラレス自身は、家の壁や家具の上に少しづつ沈殿していく所有の層でなければ何だろうか。対象とその所有者との関係を指示する次のような表現そのものが、十分に、我有化の深い浸透を物語っている。「所有されるとは...のものである」に属して存在する」とであるêtre possédé, c'est être à...」。これが意味するのは、所有されている対象が侵害されるのはその存在においてだと云ふことだ」(EN633-634)。

(M) 「「なんにある」は、ある具体的な状況の中に、諸道具・事物の具体的

縦体との関係における「なん」「なんの」、すばり事実性であり、偶然性である」(EN382)。

(N) 不在を感じる体験を他者の想像に還元する必要はない。「想像的なもの」では想像によって構成された表象と、想像された対象の現在の姿の差異を問題にしているが(IMR39)、存在論的関心から不在の問題が扱われる「存在と無」で他者のアспектは不問となる。

(O) MA344, 347-348. 手紙を通じた交流はサルトルにとって他者経験の典型例である(Cf. IMR279, EN382)。

(P) 紙幅の都合上十分に記述できなかつたが、状況のなかの身体の観取は固有身体の知覚のような事例も含んでいる。

(Q) 「人間的現実同志の *étranger entre des réalités-humaines*」(EN318)と呼ばれる。

(R) 他者は「普遍的形式的な構造」ではなく「具体的個別的条件」である(EN308)。

(S) 「の出来事は世界に到来する偶然的事実であり、かつそれを起点として存在論の可能性が開かれるという意味で、存在論を超えた形而上学的出来事でもある」(EN336)。

(T) たしかにサルトルは、おそらく「カルト的省察」を念頭に置きつつAnalogue概念に批判的検討を加える(EN394ff)。しかしこれは「類推」を、身体性をそなえた主体が他の主体に対して行う言語的かつ推論的な高次の行為と捉えたからである。われわれが示唆するよう、「対比」の語が指し示す自他同時的な生成の次元が問題となるとき、サルトルとフッサールは同じ事象に目を向けている。

サルトルの著作略号(翻訳は既存訳を参考し一部筆者の責任で表現を改め)

(*) : EN = *L'être et le néant* (1943), édition corrigée par Arlette Elkaim-Sartre, Paris Gallimard, coll. « Tel », 2010; IMR = *L'imagination* (1940).

Paris, Gallimard, coll. « folio/essais », 2010; MA = *Les mots et autres écrits autobiographiques*, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2010.

42°) : EN = *L'être et le néant* (1943), édition corrigée par Arlette Elkann-Sartre, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 2010; IMR = *L'imaginaire* (1940), Paris, Gallimard, coll. « folio/essais », 2010; MA = *Les mots et autres écrits autobiographiques*, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2010.

(赤阪辰太郎・あかやまとしんたろう・大阪大輔)